

われら  
専修人

## 好きな言葉は「飛躍」。 次の勝利、海外への「飛躍」目指して。

スポーツ界で活躍する、本学出身のプロ選手は多い。  
昨年秋の「第74回 日本オープンゴルフ選手権」で見事、優勝し、  
脚光を浴びた小田龍一プロもその一人である。  
話題の石川遼選手、今野康晴選手との三つ巴のプレーオフを、  
テレビ中継やニュースで見て感動した校友も大勢いると思う。  
大舞台でメジャー初優勝という快挙を成し遂げた小田プロに、  
優勝したときの心境、プロになったきっかけなどについて、うかがった。

### 「プロになれる!」という、 強い思いでプロゴルファーに。

もともと少年野球をやっていて、叔父にももらったクラブで父とゴルフ練習場に行ったことが、ゴルフを始めるきっかけでした。父と練習場の社長さんが知り合いで、社長さんから「ゴルフをさせてみたらどうか?」という話がありました。12歳の頃です。特にゴルフに興味があるというのでもなく、体を動かすのが好きで、たまたまゴルフだったというくらいです。

プロへの憧れという点では少年野球をやっていたので、プロ野球選手になりたいと思っていました。ゴルフを始めてからはゴルフのほうが強くなり、プロを目指したいという気持ちは中学生の頃から、ずっと持ち続けていました。「プロになりたい!」「プロになれる!」と意識して猛練習し、当時は強気でした。平日は学校が終わってから、土日は朝から球拾いに

始まり、夜は10時までやりました。片道4キロくらいあるゴルフ練習場にも走って通い、ときには鉄アレイを持ちながら走って体を鍛えました。

### ティーグラウンドから逃げ出したい ような、スランプも経験。

ゴルフ番組は、よく練習場で見ました。憧れはジャンボ尾崎さん。すべてがカッコ良くて、凄い! 憧れの人であり、目標でもありました。豪快な飛ばし屋で、魅力がありました。

プロになって、ジャンボ尾崎さんからアドバイスをいただいたことがあります。「サントリーオープン」でのことです。ずっと不調で、「駄目だな」と思っていると、次の組で回っていたジャンボ尾崎さんが、練習場でお会いしたときに「クラブフェースが開いている」と、一言、アドバイスしてくれたのです。一言ですが、立ち直りました。凄く悩んでいたのを、助かりました。とにかく、言われたことを、やろう。それ以降、スランプになったときは、言われたことを思い出しながら修正していくようにしています。

また、シード権を取って2年目のことですが、怖くてティーグラウンドに立てなかったことがあります。どう打っても、曲がってしまう。テイクバックが上らない、打ちたくない、という状況になってしまいました。

最後には開き直りというか、「やるしかない!」と思ってティーグラウン

ドに立ち、打ちました。そうすると、自然と打てるようになりました。次第に自信も生まれてきて、だんだん曲がらないようになってきました。口で言うのは簡単ですが、当時は本当に逃げたかったですよ。

### 「日本オープン」優勝! 携帯は鳴り続け、マスコミは殺到。

プロになってから「優勝」まで時間がかかりましたが、別にあせりとかはなく、あっけらかんとした感じでした。「いつか、優勝できるかな」という気楽な感じでした。性格的にも欲はあまりありませんし。試合や練習で悩むことはありますが、生活の中まで持ち込むということはありません。ツアーには北海道など距離的に遠い場所以外、奥さんと一緒にクルマで出かけており、クルマが家みたいになっています。奥さんは普段の会話でも、まったくゴルフの話を出さず、私をリフレッシュさせてくれます。性格的には私よりしっかりしてますし、楽天的で、「いいのよ」とか、沖縄の言葉で言えば「なんくるないさー」です。

「日本オープン」では、プレーオフになっても優勝は僕じゃないと思っていました。2位で十分、来年の日本オープンのシード権は確実。プレーオフで十分だ、みたいな感覚でした。優勝した瞬間は、「おっ、勝っちゃったよ

!?」。優勝の実感なんて、全然、湧かなかったですね。ただ、それから携帯電話が鳴り止みませんでした。僕の携帯も、奥さんの携帯も、キャディをしていた僕の弟の携帯、3人の携帯が鳴りっぱなしでした。当日の夜は、NHKの出演など忙しさが続き、夜中の12時前になって、やっと食事することができました。ようやく優勝の実感が湧いてきたのは、翌日になってからです。

優勝してから変わったのはマスコミの注目を浴び、取材を受ける機会が増えたことです。また、鹿児島に戻っている時間がなかったので、優勝した翌日、スーツを買いに東京・銀座に行ったら、まったく知らないおじさんから、「見てたよ」「応援してたよ」と声をかけられたこともあります。それも1人ではなく、数人の方から。

優勝した「日本オープン」の次のトーナメントは、「ブリヂストンオープン」でした。練習ラウンドはギャラリーのカメラ撮影OKでしたので、ギャラリーが押し寄せてきて全然、前に進めなくなってしまいました。これには、びっくりしましたし、一緒に回っている二人に申し訳なかったです。先日、トーナメントに参加したハワイでも、「見ていたよ」という方が多かったですね。

### まず2勝、さらに3勝……、 強い意思があれば夢は、かなう。

次は2勝、さらに3勝と、積み重ねていきたいと思っています。「日本オープン」では、いいプレーができたので、またあのようなプレーをしたいと思っています。そのためには練習量です。

それと、「日本オープン」のときは、

### 小田龍一

プロゴルファー

おだ りゅういち●1995 (平成7)年、商学部商業学科入学。1976年生まれ。鹿児島県出身。2001年、プロテスト合格。2005年からシード権をキープ。「第74回 日本オープンゴルフ選手権」(2009年10月15日~18日)では、男子プロゴルファー日本人の座を勝ち取る。Misumi所属。趣味は読書、主に日本のミステリー。好きな言葉は「飛躍」。



ちょっと特殊な経験というか、言葉ではなかなか表現しづらいのですが、自分じゃないような感じでプレーしました。プレーしている自分を少し離れた場所から、もう一人の自分が見ている、そんな感じですね。第三者的な感覚で、自分自身を見ている。肉体の自分がプレーしていて、精神的な自分が「頑張ってるな」と、冷静に見ている。そんな不思議な体験をしました。そうした体験を、再現できれば2勝、3勝することも可能と考えています。自分の世界に引っぱり込む。これは、なかなかできないことですが……。

将来の夢として、日本である程度の実績を積んだら、次は海外への「飛躍」も考えています。私は「プロになりたい!」ではなく、自分は「プロになれる!」と思って練習しました。頭の中で、「なれる!」と描いて、プロになった自分をイメージして練習する、そうした強い意思が、夢をかなえるためには大切だと思います。(談)

(2010年1月、鹿児島にて取材)  
取材協力:鹿児島高牧カントリークラブ  
※今回の取材にあたって、ご尽力いただいたゴルフ部岡村誠男部長(専修大学理事)、肥後勝司鹿児島県支部長に感謝を申し上げます。



祝賀会での  
小田龍一ご夫妻。

昨シーズン終了後の12月14日、小田プロが所属するMisumiグループの三角皓三部長の発起で、優勝祝賀会が開催されました。鹿児島県知事、鹿児島市長をはじめ600人を超えるファンが詰めかけ、小田プロの快挙と優子夫人のサポートを讃えました。